



トンボとの出会い



園長 渡邊 舞

「やった～！トンボさん捕まえた！」最近、園庭ではこんな喜びの声があちこちから聞こえてきます。トンボたちが園庭に元気に飛び中、西幼稚園のみんなは、トンボと仲良くなろうとしています。最初は、手作りの網をもって、トンボを追い掛け、網を勢いよく振り回す姿がありました。でもなかなか捕まえることができません。それでもあきらめずにトンボを捕まえたいという思いから先生にコツを教えてもらい、遊具に止まっているトンボにそっと近づくようになりました。「早く



トンボを捕まえたい」という気持ちをぐっところえ、焦らずにタイミングを待つその姿は、トンボの気持ちに寄り添おうとしているようでした。そしてタイミングがあった瞬間、ようやく捕まえることに成功。園庭中に聞こえる声で「捕まえた～！！」の声が広がります。別の場所でドングリ拾いをするお友達や滑り台を滑っているお友達も思わず振り向きま。羽を指で挟んで、誇らしげにトンボを持って見せるその表情はうれしさでいっぱいです。それからはトンボの観察が始まります。大きな目、時折動く足、透き通った羽…他の場所にいたお友達も加わってそのトンボの様子を凝視します。じっくり見つめられ、きっと、トンボも驚いていたことでしょう。

幼稚園教育の指針、基準である「幼稚園教育要領」の中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」というものがあります。10の姿は幼稚園の活動全体を通して、育みたい資質・能力の具体的な姿を示しています。その中に『自然との関わり・生命尊重』というものがあります。



<自然との関わり・生命尊重>

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしての関わり、大切にすることを覚えるようになる。(幼稚園教育要領「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」より)

トンボの観察をしていたお友達は、その後、自分なりに気付いたこと、感じたことをつぶやいていました。その時です。トンボの足がバタバタし始めました。少し考えて「放してあげる」と言ったのです。自分の力でやっとのことで、苦労して捕まえたトンボ。好奇心や探求心をもってかかわり、愛着も感じ始めていたはずですが、最後は放すことを決断したのです。じっくりトンボを観察し、羽の振動を指で感じた実体験を通し、トンボの気持ちや命の尊さを自分なりに感じ取って、大切にしようという気持ちがうまれたのではないかと考えます。

映像や写真からは得られない、そのものの奥の部分を感じ取ることができる実体験は、幼児期において欠かすことのできないものです。放されたトンボは、西幼稚園のお友達の心がますます豊かに育つことを願い、今日もまた、園庭を飛びながら、みんなを見守っていることでしょう。